
GATE

杉 御零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G A T E

【Nコード】

N 5 5 2 8 Y

【作者名】

杉 御零

【あらすじ】

普通ではない力を持っていた宮野 修治は、ある日“魔物”に襲われる。そこを美少女に助けられ、GSSCという組織の存在を知る。修治は自分の力が“魔物”を惹き付ける事を知らされ、組織に勧誘されるも、それに応えられない。だがついに、修治の学校にゲートが出現し。 。 戦闘パート、日常パートあり。基本、チート主人公です。ハーレム予定。不定期更新です。

魔物襲撃

え、マジで？

キーコ、キーコ、キーコ。

午後10時過ぎ公園。只今俺はコンビニの帰りでなんとなくブラ
ンコを漕いでいる。

暗い公園に響く音が地味に怖い。

俺の名前は宮野^{みやの} 修治^{しゅうじ}。高校1年生で近くの天野岩屋^{あまのいわや}高校に通っ
ている。通っている身ながら凄^{すご}い名前^{なまえ}の高校だと思^{おも}つ。

と、^{モノローグ}1人語りに入りかける。

ふう、危ない所だった。

またなんとなく辺りを見渡す。

すると、現実に意識が復帰した事で目の前の異変に気付く。

俺の正面のあたりの闇が渦巻いていた。

よく見ようと目を凝らす^{こら}すが暗くてよく見えない。

そうしている間も闇は渦巻きながら大きくなっていった。

俺の本能はガンガン警鐘を鳴らしている。

が、やはり好奇心の方が上回った。

やっぱり気になるよな、こつ^{こつ}というの。

そんなんで、観察する事にした。

しかし、闇は予想以上に大きくなった。

最初、地面から膝くらいまでだったのが、既に3m程にまでなっ
ていた。

どこまでデカくなるんだ？

もう帰ろうかな！。そう思い始めた時だった。

闇の中から何かが現れた。

それは始めはぼんやりとした輪郭だけだった。だが、次第にくつきりとしてきて、最終的にそこに現れたのは巨大な門だった。

2 m強の巨大な門。

公園にあるにはあまりに異質な物だった。

数秒間固まった。

無理もないと思う。言い訳をする訳ではないが、この状況で冷静な奴の方がおかしい。だから俺がフリーズしてしまったのも仕方がない筈だ。

たとえそのせいでその次に起こった事に対処出来なかったとしても。

ギイ

門が開いた。

それにーヤバい、なんか魔物っぽいのがww じゃなくてわらわら湧いて出て来た！

魔物達はすごく強そうだ。動物っぽい奴もいるが、明らかにこの世界の生物ではない異形も見受けられる。

コマンド、逃げる。

しかし、回り込まれてしまった！

コマンド、戦う。しかないか、嫌だけど。

「ゲルオツ！」

イノシシの様な魔物が吠えて突っ込んできた。イノシシだから突進って、愚直だな。

さて、どうするか。

相手はイノシシといっても化け物だ。突進も見たところ最低でも100km/hくらい速度がでている。まともに食らったらマズい。

しょうがない、奥の手を使うか。出来れば使いたくなかったんだが、今はそれも言ってもらえない。

「プロテクト！」

俺がそう発声すると、青白い盾が現れて俺を守る。

突っ込んできたイノシシは頭をぶつけて砕けて死んだ。

まず

一体？

まあ、イノシシの事は兎も角、この障壁精製が俺の能力だ。

門の方を見やると更に魔物達が湧いてきていた。

俺は魔物達に向き直って見据える。

「っしやあ、どんだん掛かってこいやっ！」

魔の群　一匹見たら百匹いると思え!?

20分後。

「ぜえ、はあ。くそっ、もう無理だ!」

結局、200匹程殺した所で俺は勝てないと悟った。
何故かって?

いや、だって卑怯だろ敵。殺しても殺しても湧いてくるし。

という訳で現在、能力でドーム状の防護壁を造って籠城中。

俺は自分の能力には自信がある。

この壁は滅多な事では壊れないと思っている。

壊れないとは分かってはいるが、分かっているけど、障壁に張り付いてくる魔物を見ていると生きた心地がしない。

俺の障壁は半透明だから向こう側が見えるのだ。

コンビニ弁当、食うのやめようかな。

醜悪な魔物のせいで食欲は失せていた。

更に10分後。

「生きて帰れんのかな?」

不安になってきた。

障壁は破られない筈。でも、ずっと閉じこもっていたら恐らく餓死する。

それまでに助けが来るか？

兎も角、何時まで籠城するかは分からないが、食料はコンビニ弁当1つ。飲み物は家にあるからと買わなかった。

うーん、喉渴いた。

それより、暇だ。

食料問題とか考えて気を紛らわそうとしてみたが喉が渴いただけだった。

そろそろ本気で暇になってきた。

よって

脱出を試みる事にした。

突然だが、ここで俺の障壁について少し説明をする。

障壁は俺と相対的な位置に出現し、どんな力が加わっても動かない。

だが逆に、俺が動けば相対的に障壁も動く。

そこで俺は思いついた。

障壁ごと駆け抜け、魔物を掻き分けて逃げよう！

脱出作戦決行！

更に更に10分後。

結論から言うと駄目だった。

俺がいくら逃げてても、足の速い、もしくは飛べる魔物が追いますが

つてきて魔物の群れから抜け出せない。

それに、今もそうだが、何百匹という魔物が障壁に張り付いていて周りが見えづらい。結果、沢山走ったのも公園の中をぐるぐるしただけだった。

「マジで無理かも、　　つて、あれ？」

軽く諦めムードになりかけた時だった。

俺の目が信じられない光景を捉えた。

少女が1人、公園の入り口に立っていた。それも、かなりの美少女。今は美少女とか気にしている場合じゃないか。

髪は水色のショートヘアで、おとなしそうな整った顔に眼鏡をかけた、線の細い華奢な体型の少女だ。

と、つい少女の観察をしてしまったが、俺はそこで重大な、しかし至極当然の事に気がついた。

あの娘危なくね？絶対魔物に狙われると思う。

すると

「グララララ！」

「キシヤー！」

「ブモオウ！」

俺が恐れた通り、魔物達が少女に気づいてしまった。そして案の定、魔物達は少女に襲いかかっていった。

少女の姿が魔物の群れに埋もれて見えなくなる。

俺は最悪の状況を予想し、思わず目を閉じた。

しかし直後、俺の予想は見事に裏切られた。それも、予想だにしない方向に。

ドツガアアアアアアアアア!

轟音が鳴り響いた。

「というか今の、魔物が出す音じゃないよな? ということは

恐る恐る目を開く。

するとそこには荒野、いや、焦土が広がっていた。そこに1人立っている少女。

この事からわかるのはただ1つの事実。

あの少女が一撃で数百匹の魔物達を消し飛ばしたという事。

「どんだけ強えんだよ」

思わず驚きが口からもれてしまう。

それ程圧倒的な、理不尽な強さだった。

少女の攻撃はほとんどの魔物を消し去っていた。

あまりの驚きに気付くのが遅れたが、俺の周りの魔物達も1匹残らずいなくなっていた。

「というか、俺もこの防護壁が無ければ消し飛んでたよな?

少し恐ろしい想像に軽く身震いする。

そんな俺の事に気付いているのかいないのか、少女は俺に見向き

もせず、真っ直ぐ門に体を向けた。

「ゲート、補足。目標、破壊します」

少女が喋った。

声も可愛え！

じゃなくて、ゲートって言ったな。やっぱりあれは門なのか。

「攻撃、開始」

少女は、そう言い右の手の平を突き出す。

直後、

ドガン！ズドオン！ズジャー！

俺の拙いボキャブラリーで言うとそんな感じに、少女の手の平からビームが何発も放たれた。

ビームは俺の障壁に似た色をしていたが、防護的な俺の能力と比べると随分暴力的だ。

先ほどと同じ様な攻撃を放ったのだらう。魔物達を一撃で消し去ったのも、これを見れば納得出来る。

そのビームをもろに受けた門、ゲートといったか。まあ、そのゲートの方は、勿論耐えられる訳もなく消し飛んだ。

周りを見ると、何とか生き残っていた魔物達が塵になって消えていった。

ゲートが無いと生きていられないのだらう。

「破壊、完了しました」

少女はそう言った。恐らく先ほどからのも含め、マイクが何かで報告しているのだろう。

「かっこいいー。それに美少女（そろそろしっこいか？）」。その様な事を考えて見ていると、少女はこちらに歩いてきた。

「」

少女は俺の目の前に来ると、じい〜っと俺の顔を覗き込んできた。

「えっと」

俺は何か言おうと試みる。が、何と言えば良いのか分からない。どうしよう。

。 。
そっだ。

とりあえず、まずは助けて貰ったお礼だ！

「ありがとうな」

「」

しかし、少女は何も言わない。これでは間が持たない。

どうしようかと考えていた時だった。

ブロooooooooー、キィ。

公園の入り口近くに黒いボックスカーが止まった。
少女は車の方を見て、再びこちらを向いた。
そしてようやく口を開いた。

「 ついてきて下さい」

「へ？」

いきなり言われた事が理解出来ず、一瞬戸惑う。
すると少女は俺の手を引いて歩き出した。

「えっ？ちよっ、まっ」

強引に引つ張られ、ボックスカーの近くまで来る。

「待っていて下さい」

そう言つと少女は車の中にいた人と何か話し出した。
しばらくすると、少女は車のドアを開けた。

「さあ、早く」

乗れという事か？

躊躇していると、再び手を引かれて車の中に乗せられそうになる。

「俺、帰れんなきゃいけないから」

仕方がないので、そう言つて逃げようとしたのだが

「っ！」

少女がその細い腕からは考えられない様な力で俺の手を掴んでいて離れない。

「たぐすけて〜」

結局、車に乗せられてしまった。

特殊部隊GSSC 秘密組織って本当にあるんだ!?

数十分後、どこかのビルについた。

見た限りは変わった所はない。よくある普通のオフィスビルの様だ。

「ここは?」

「ゲート破壊工作特殊部隊GSSC、日本支部本部です」

はい?ゲート

破壊?特殊部隊?

えええ。

なにそれ!?

俺、混乱の極み。

無駄に長い名前の、よく分からない場所に、理由も知らされず連れてこられたこの状況。

なにこれ!?

俺の混乱をよそに、少女はビルへと入っていく。

もうここまで来たら行くしかないよな。

俺も覚悟を決める事にした。

俺は少女に続いて自動ドアを通りビルへと入る。

と、そこで、少女に声をかける者がいた。

「あつ、No.7。任務は終わっ、って、え?修治!？」

ところが、話の途中でいきなり俺の名前が出てきた。

俺は反射的に顔を上げ、相手の顔を見る。

つて、光？

そこに居たのは俺の幼なじみの少女、朝霧 光だった。
光とは小学校入学当初からの付き合いでけっこう仲がいい。
外見的特徴を言うと、髪型は腰まで伸びた黒髪、顔立ちは大和撫
子といった様で和風の美少女だ。

そこまでは良かった。

そこまでは俺の知っているいつもの光だ。

だが、目の前にいる光は何故か巫女服を着ていた。

何故に巫女服？それにここ神社じゃないし。

まあ可愛いからいいか。可愛いは正義！

そう言っつて許せる程に、光に巫女服は似合っていた。

> i 3 5 5 3 5 — 4 4 6 1 <

話が脱線した。

それより、何で光がここに？

「何で修治がここにいるの!？」

思っていたのと同じ事を言われた。

まあ、この状況なら誰だってそう言うだろうな。

それにしても、大して動じてない俺すごくない？

短時間に沢山驚いたせいで驚きに対して免疫が出来てるのかもな。
だからもう、光がここにいるという事実を受け入れるだけだ。

だが、光はそうはいかなかったらしい。

「どづいつことなの、No.7!？」

少女に対して凄い剣幕で問う。

しかし、それに対し少女は少しも表情を変えずに答える。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するつもりで連れて来ました。では、急ぎますので」

そう言い、少女はスタスタとエレベーターの方へ歩いていった。

それをぼけーっと見ていると光が俺に言った。

「ほらっ、あんたも行くのよ！話は明日聞くから」

「えっ？ああ 分かった」

光に言われて気付いた。

俺も行くんじゃないか。

少女の後を追いかけて、俺も急いでエレベーターの方へ向かう。

少女について行くと、扉からして他の部屋とは違うと分かる部屋の前に着いた。

中にいるのは恐らく組織内でもけっこう位の高い人だろう。

こんこん。

少女が扉をノックする。

「どござ」

中から返事があった。

誰なのか聞かずに入室を許可するとは、よほど組織内の人達を信頼してるんだな。

もしくは監視カメラで見ているか。

部屋に入ると、中は社長室の様な雰囲気（あくまでも“雰囲気”だ。実際に社長室なんて見たことないからな）になっていてまたまた社長の様な雰囲気の人が座っていた。
その人は20代くらいの男で、イメージ的にはやり手青年実業家といった感じだ。

男に向けて少女が話し掛ける。

「対魔法生物殲滅兵器アンドロイドNo.7、帰還しました」

アンドロイド？まあいい、この事については後で聞いてみるとしよ。

「お帰り、No.7。それと そちらの方は？」

男が少女に言葉を返す、更に俺の方を見て問いかける。

ここはきちんと挨拶しなければ。

「ごんばんは、宮野 修治と申します」

キリツと、格好良く言えた筈。

それに対して男の反応は

「はい、こんばんは。」

「うちの職員じゃないよね？」

微妙だあー！

凄い微妙な反応帰ってきた！

がつくり。意気消沈。

「作戦中にこの方から強力な魔力を感知しましたので、隊長に報告するために連れて来ました」

俺の落ち込みはいざ知らず、少女は男（隊長らしい。これからはそう呼ぶようにしよう）に光にしたのと同じ報告をした。

「そっか、ふむ」

隊長はそれを聞き、少し考える。

そして、真っ直ぐに俺を見てきた。

その表情は真面目そのもので、場の雰囲気が一気にかたくなった。
重苦しい沈黙。

そして男が口を開いた。

「面倒くさい説明は省いて単刀直入に用件を言わせてもらおうよ、宮野 修治君」

「いや、説明はして下さい」

「

」

沈黙。

隊長は露骨に嫌そうな顔をした。

俺は悪くないよな？

誰だって説明なしで判断などできない。説明を求めるのは当然の事だ。

それに、隊長、面倒くさいって言ってたよな？ただのわがままじやねえかっ！なんか俺の方がわがまま言ったみたいになってるけど。

「しょうがないな、じゃあまずは説明から始めるよ」

今、しょうがないって言ったよ。どこまで面倒くさがりなんだよこの人。

「ん、まずこのビルだけど、ゲート破壊工作特殊部隊GSSC日本支部本部として使わせてもらってる」

これはさっき少女からも聞いた事だ。

「ところで、No.7が連れて来たって事は君も何か力を持っているのかな？」

力っていったら、障壁精製のことだろう。

「はい」

答えるが隊長に反応は特にない。

俺がYesと答えると分かっていたのだろう。

「それで、君も見たんじゃないかな、大きな門と魔物、もしくは魔物だけでも」

「見ました」

「そうか、良く生きていたね。あの位の大きな門になると出て来る魔物も強いからうちの戦闘員でも3人位で壊すのに」

マジ？

実はそんなヤバい状況だったのか。

兎も角、と、隊長は話を続ける。

「我々は、その門と魔物達を殲滅する事を仕事、いや、責務としている」

そうか、この組織があるから今まで俺達一般人は被害も無く、知りさえしなかったのか。

しかし、と、そこで少し悔しそうに隊長が話し出した。

「しかし、我々は未だ、魔物の行動目的やゲートの出現場所など多くの事が分かっていない」

隊長はそこで一旦話すのを止め、言いづらそうに続ける。

「ただ、最近になって分かってきたんだが、魔物は君の様に強い多くの魔力を持った人に惹かれてる事は分かっている。だからこれからも君の周りではゲートがひらくだろう」

これで大体話が読めてきた。

ゲートの開く場所をある程度把握し、ゲートと魔物を殲滅するために俺にこのGSSCという組織に入れというつもりだろう。

とりあえず今は先手を打っておく事にするか。

「だから、俺にもこの組織に入れと？」

そう言つと、隊長は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元に戻った。

「最近の子は頭の回転が早いねえ、話が早くて助かるよ。ここ最近、魔物達をが活発化してきてね、我々としても戦力は多い方がいいんだ」

正直言つて迷う。

戦えるのに戦わないのは怠慢だろうか。

俺も人類を守るといふのは憧れる。だが、これは現実だ。戦いの最中で死ぬことも有り得る。

俺は、

「考えさせて下さい」

決断はできなかつた。

この場で簡単には決められない。

すると隊長は少しがっかりした顔をした。

「そうか、やはり今すぐつてのは無理か。じっくり考えてくれ。じゃあしばらく、護衛を兼ねた監視役を派遣しよう」

「監視役？」

「ああ、今後君の言動には少し制限がつく。この事やゲート、魔物の事は喋ってはならない」

思えば当然の事だ。機密組織なんだし。

それにしても、監視役とはな。誰だろう、光かな？

「話は以上だよ。遅くまで済まなかったな。No.7、彼を送って行ってやってくれ」

「了解しました」

俺は少女の後をついてビルを後にした。

ビルから出ると少女はこちらを振り向きもせず、スタスタと歩いていってしまう。

俺も慌てて追いかける。

こうして俺＋同行者は家路についた。

スタスタスタスタ。

少女はただひたすら歩いている。

GSSCのビルからここまでずっとこの調子で、無言で歩いてきた。

正直言って気まずい。

何か話題が欲しい。

「なあ」

とりあえず話し掛けてみる。

英語の先生が言っていたが、海外旅行をしたらとりあえず外国人に話し掛けてみるべきらしい。いざ話せば、話す事は後から幾らでも浮かんでくるという事らしい。

しかし、

「何ですか？」

「あ、あのさ、あの」

何も浮かばなかった。

「？何でしょう」

少女が不思議そうに聞いてきた。

ええっと、話題話題。

あ、そうだ。

「俺、本部のビルの場所とか見たけど、帰り目隠しとかしなくないのか？」

ふう、なんか思いついたぜ話題。

「何故　ですか？」

「いや、口外したらまずいだろ？」

俺がそう言くと少女は小首を傾げ（可愛え！）聞いてくる。

「口外するんですか？」

そうくるか。

「いや、しないけど」

「なら大丈夫でしょう？それに」

何この無償の信頼！

嬉しいけど、こんなにあっさり信頼されちゃっていいのか？

あれ、でも今、それについて言ってたよな。

嫌な予感。

恐る恐る聞いてみる。

「それに、何？」

「それに 監視役も付いていますから」

ガッデエーーム！

信頼されてねえ！

それに怖えよ！新手の脅しかつ！

スタスタスタスタ。

そしてまた無言。

この空気なんか嫌だ。

スタスタスタスタ。

何か話題　　は、もういいか。

スタスタスタスタ。

あ、家の近くだ。

「家の近くまで来たからもういいよ、ありがとう」

「そうですか、分かりました。では、それがし某はこれで」

ん？某と言ったか。古風な一人称だな。

そついや、この娘の名前知らないや。

「ちょっと待った」

帰ろうとする少女を呼び止める。

「そついえば自己紹介してなかったと思ってさ、俺の名前は宮野修治」

「知っています。先程、隊長に名乗っていたのを聞きました」

知っているのなら形式的なものとして受けとめてくれれば良かったんだが。

「君の名前は？」

そう聞くと少女は一瞬、迷う様な、躊躇う様な素振りをみせ、そして俺の問いに答えた。

「某は名を持ちません」

特殊部隊GSSC 秘密組織って本当にあるんだ！？（後書き）

1話、2話が短かったのに対し、3話は少し長めになりました。
4話は少し短めになる予定です。

機械少女と名前 名付け親は俺!?

「某は名を持ちません」

その言葉の意味をすぐには理解できなかった。
名前を持たない人などいない筈だ。そもそも名前が無ければ戸籍登録さえできない。

「それってどういう」

俺がなんとか疑問を口にすると少女は答えた。

「某は人ではないので名を持ちません。機体名ならありますが。機体名は“対魔法生物殲滅兵器アンドロイドNo.7”です」

少女が更に口にした事は俺の疑問を増やしたただけだった。
どういふ事だ? 全く理解できない。

とりあえず聞くか。

考えても分からない。

「人じゃないとか、機体名とか、どういふ事だ」

「それは、

少女は自分について語り出した。

話は1時間程続いた。外で立ち話するには少々長い時間だった。

聞いた話を要約する。

今もあまり居ないが、元々GSSCにはほとんど戦闘員が居なかった。

そこで出た改善案の一つに、ロボットに戦わせるというものがあった。

そして、試作機のNo.1、No.2が作られた。それらはあくまでも試験用で、プロトタイプ実戦には向かなかった。

その後戦闘に特化させたNo.3、No.4が作られた。それらは普通の相手ならば、単騎で一個師団を10分で壊滅される程の実力があつた。しかし、魔物には勝てなかった。

そして、研究員達が自棄やけになつて極限まで強化したNo.5。その作成の為に兵器に関する国際禁止条約の7割を特例で無効化したそれは、単騎で大陸1つ滅ぼすとさえ言われた。

人類の技術の粋たるNo.5は、ゲートを2つ破壊する事に成功した。しかし、3つ目を破壊する際に強い魔物が現れ、激闘の末に破壊された。

その時の魔物を見て、司令部の人々が口を揃えて「悪魔かつ！」と言つたらしい。

悪魔じゃなくて魔物なだけだな。

これ以上のものは作れないと言われたNo.5でさえ勝てなかった為、ロボットでは魔物には勝てないと考えられ始めた。

そのうち、ロボット計画自体が諦められかけていた。

そんな時だった。“魔力”の発生方法が発見されたのは。

これまでのデータから、魔物に有効打を与えられるのは魔力を使った攻撃だけだと分かっている。

そして当初は魔力を持つのは人間だけで、能力を使い戦闘ができるのは強くない魔力を持つ者だとされていた。

後半はあっている。だが、前半は違った。魔力を持つのは“人間に限らず“心を持ったもの”だという事が後から分かったのだ。

そこからは早かった。僅か1ヶ月で“心を持つ”^{A I}人口知能が開発された。

それはすぐさま軽量化され、ロボットに搭載された。ロボットは感情面の関係で人型となった。

こうして、歴史上初の心を持つロボットが作られた。それがN O . 6。^{6。}凄まじい発明だったが、N O . 6は軍事最高機密として公開されなかった。

N O . 6はロボットにして“心”を手に入れた。

だが、最初は能力を使えなかった。

魔力が少な過ぎたのだ。

結果としてN O . 6は改良を施され、人為的に魔力量を増やされる事で能力を使えるようになった。

そして、N O . 6のデータを元に戦闘用に作られたのがN O . 7。
この少女だという。

これで謎が解けた。

隊長と話した時アンドロイドとか言っていた理由も、ようやく分

かった。

それにしても、にわかには信じがたい話だ。
だが、幾ら信じがたくともこれが真実なのだろう。

それと、少し気になった事があった。

「なあ、俺達と同じで心があって感情があるんだろ？ だったらさ、名前が無くていいのか？ 欲しくなんないの？」

正直、失礼な質問だと思う。 だけど俺は、思った疑問をそのまま伝えたかった。

そして、正直な気持ちを答えて欲しい。

すると少女は、少し考えるようにした後、俺の問いに答えた。

「分かりません。心はあります。感情もあります。 ですが、それがどの様なものか分からないのです。 だから某は、名前が欲しいのか欲しくないのか分かりません」

自分の気持ち分からない、か。

それはどんな事だろう？

嬉しくても嬉しいと分からない。 頬を伝う涙の訳も分からない。

俺も自分の事ではないからはつきりとは言えないが、それはきつと寂しい事だろう。

できる事なら、この少女に“気持ち”を知ってもらいたい。 沢山喜んで、沢山悲しんで欲しい。 まあ、悲しみは少ない方が良いが。

決めた。

俺はこの感情を知らない少女に本当の“心”を知ってもらおう。

そのために今できる事をしよう。

「そうか。でも多分、名前があったら嬉しいと思う。別に嫌ではないだろ?」

「はい。嫌では ないと思います。もしかしたら、嬉しいかもしれません」

「じゃあさ、俺が考えてやるよ、名前。いい?」

「あなた貴殿が名前を? 変なのは嫌ですよ?」

「ああ、任せろ」

名前か どんなのが良いだろうか。

そうだ、No.7だから

「ナナってのはどうだ? No.7だからナナ。そのまんですきるかな?」

「ナナ。某の名?」

少し不安そうに確認をとってくる。

俺は出来るだけ頼もしそうに一言答える。

「ああ」

俺がそう肯定すると、ナナは、花の様な　とまではいかないが
確かな微笑みを浮かべた。

感情が分からないと言ってたけど、十分笑えるじゃん。

「じゃあ、またな。ナナ」

「はい！」

名前で呼ぶと更に嬉しそうにして帰っていった。

そして俺も帰路へついた。

> i 3 5 4 3 1 | 4 4 6 1 <

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟

あの日から数日、何もなかったかの様に普通の日が続いた。

光に教室で会った時に巫女服について聞こうとしたのだが、「なあ、この間の巫女ふ」^{プレッシャー}と言った所でこの世の者とは思えないほどの圧力を放ちつつ睨まれたので聞くのは止めた。
いや、あれはマジで怖かった。

そして、あつという間に2週間が過ぎた。

あの日からちょうど2週間と1日たった今日。
現実、俺は寝坊して遅刻しそうになっていた。
とはいえ、ギリギリだが一応学校には着いている。あとはHR^{ホームルーム}までに教室に滑り込めばOKだ。

という訳で教室へと急ぐ。
と、そこで異変に気づいた。

教室の方がやけに騒がしい。
学校なのだから多少騒がしくともおかしくはない。
だが、今日の“騒がしさ”は何時もとどこか違った。

何とも言えない不安に掻き立てられ、教室へ向かう足が早まる。
教室へと近づくとつれ喧騒は大きくなっていく。

そして、俺の耳が悲鳴を捉えた。

ふざけた悲鳴ではない。心の底から恐怖した様な、そんな悲鳴だ。

これはただ事では無い。

そう判断し、教室の方へと駆けだした。

いや、駆けだそうとした。

しかしすぐに俺は足を止めた。

何故なら、教室の方から大量の生徒が一気に走ってきたからだ。

あれは、逃げているのか？

沢山のクラスメイトが駆けてくる。

「おいっ！何が起きた!？」

叫ぶ様にして問い掛ける。

それでもしないとこの状況では聞こえない。

「ばっ、化け物が出て、それでっ！逃げ遅れた奴をっ！お前も、早く逃げる！」

クラスメイトの加藤という男が答えてくれた。
そしてすぐに脱兎のごとく駆けて逃げていく。

今、加藤が言った“化け物”という言葉。

思い当たるのは1つしかない。

恐らくは、

化け物
魔物の事だろう。

「ちくしょうっ！」

思わず悪態をつく。

何で、何で今日なんだ！

何で俺が遅刻した日につ！

恐らくもう何人かは死んでいる。

俺がいたとしても守れたかどうかは分からない。

だが、守れたかもしれない。

しかし現実として俺は遅刻し、クラスメイトを守れなかった。

後悔の念に駆られながら、もう人気のなくなった廊下を駆け抜ける。

目的はなかった。ただ走る。

もう何も考えたくなかった。

曲がり角を曲がる。

「っー」

そこで思わず息を呑む。

そこには、地獄が広がっていた。

まず最初にしたのは、吐き気を催す様な濃厚な血の匂い。

そして、床に横たわるクラスメイトの死体。

顔が原形を保っていて確認できるのは3人、かなり仲の良かった奴もいた。

皆、体中貪り喰われた様に千切れていた。

友人の側に膝をつき、瞼を閉じさせる。

恐怖に染まったまま、もう動かない目を隠す様に。

俺にはもう見ていられなかった。

「喜多、浜路」

友人達との思い出が脳内にフラッシュバックする。

そして、目の前の友人達の姿が目映った瞬間

俺の中で怒りが爆発した。

まるで、火山の噴火の様に。

悲しみ、後悔といった感情など塗りつぶして、俺の心の中を憎しみ、憤怒といった感情で埋め尽くした。

そして俺の下した決断。

友の死を背負う覚悟。

魔物共を一匹残らずぶち殺す。

それ以外は考えられなかった。

死を呼ぶ力 非情な現実と確かな覚悟（後書き）

すみません！

5話の更新地味に遅れました！

さて、それと報告です。

4話にナナのイラストを載せましたー！（パチパチー）

是非、見て下さい。

絶望の渦 2度目の絶望(前書き)

気がついたらPV1000突破してました！ありがとうございます！
多いのかな？

始めたばかりと考えると少なくは無いと信じます。

ともかく、皆さん応援ありがとうございます！これからも読んで下さい！

絶望の渦 2 度目の絶望

俺は再び走り出した。
復讐ターゲットの相手の魔物を探して。

魔物共は、どこにいる？

門ゲイトはどこだ？

やはり教室の方が？

考えをめぐらせていた時だった。

「きゃーー！」

教室の方から悲鳴が聞こえた。

まだ生きている人が居る！？

助けに行かなくては！

もう魔物共には殺させない。

「うおおおー！」

ズガアアン！

声が出た方へと、壁をぶち破って最短距離で進む。

ドガッ！

最後の壁を突き破り、悲鳴のした教室に突っ込む。

中を見ると、クラスメイトの的場まとはという少女が鎌を持つ魔物に捕まっていた。

そして少女は俺に気づいて助けを求めようとした。しかし、

「修治君っ！助け、

ブンツ、ドチャツ！

助けを求める言葉は最後までは言われなかった。

最初、何が起きたのか理解出来なかった。

いや、本当は理解していた。

魔物が少女に鎌を振り下ろした。助ける暇も無かった。

ただ、俺の脳は理解する事を拒んだ。理解したくなかった。

突如、脳裏にある言葉が蘇った。

「魔物は 君の様に強い多くの魔力を持った人に惹かれている事は分かっている」

急速に体から力が抜けていった。

先ほどまでの激しい怒りも消えていく。

喜多、浜路、的場、他のみんな。

俺は彼等を救えなかったんじゃない。

俺のせいで死なせてしまったんだ。

だって、俺のせいで門ゲートが開いたから。

絶望の渦 2度目の絶望（後書き）

修治君がちよっと酷い事になりました。
でも大丈夫です。明日は来るさ！

さて、3話の光の登場シーンにイラスト載せました。
それで、今回と前回のイラスト。リアルでお友達の人が描いたんで
すよ。

その人の書いてる Novel、SWORD OR SCYTH
Eも興味があれば読んでみて下さい。
SOSって検索してでると思います。

復活 拳に再び力を込めて

「それで終わりか？」

「えっ？」

ズシャアアア！

不意にかけられた声に目を開く。

するとそこには鎌ごと真つ二つになった魔物と1人の少女がいた。恐らく、この少女が魔物を斬り殺したのだろう。

少女は金髪に白い肌、そして燃える様な紅い瞳を持っていた。

また、手には少女の体の3分の2ほどの大振りバスタードソードの大剣をもっており、魔物を斬り殺したのもこの武器だろう。

そして少女は、その紅い瞳で俺を睨み付け、

「立て、意気地なし」

いきなり意気地なし呼ばわりしてきた。

仕方がないのでとりあえず立ち上がる。

別に助けてもらいたくは無かったが、一応礼儀としてお礼を言うておこう。

「助けてくれてありが

「何故、攻撃しなかった？」

「
」
礼を言おうとしたが、少女は礼を聞く気など無いらしくいきなり質問してきた。

そして、更に少女は言葉を続ける。

「貴様の力なら今の魔物程度倒せただろう」

「俺は
」

死ぬ気だった。と、

自分のせいで周りの人が危険に晒されるのなら、自分が死ねばいいと思ったと、そう言うべきか。

「俺のせいで周りの皆が死ぬのなら、俺は
、

「自分が死ねばいいと思ったのか？」

言おうとしていた事を言い当てられる。

凶星なので何も言えない。

すると、少女の俺を睨む目つきが更に鋭くなる。

そして少女は大剣を俺に突きつけて、言い放つ。

「甘ったれるなよ、意気地なし」

更に少女は言葉を続ける。

「確かに魔物達は強い魔力を持つ奴に引き寄せられる。だが、たっ

校庭の方で爆発が起こった。
外で誰かが戦っている様だ。

少女は、時間がないな　と呟き、俺に問い掛けた。

「問おう、貴様は戦う気は無いのか？」

俺は　。

「クラスメイトの仇。そして人類を守る　いや、そんな大仰なものではなくていい、周りの大切な者を守る為に戦う気は無いのか？」

貪り喰われた喜多達、目の前で殺された的場、走って逃げ去った加藤達。守れなかった者、守るべき者。それら1人1人が頭に浮かぶ。

「戦う気があるなら拳を握れ！敵をみる！見事、守りたい者を守ってみせろっ！」

俺の力なら魔物に対抗できる。
なら、今やるべき事は1つ。

「^{ゲイト}門をぶっ壊す」

俺の返答を聞くと少女は満足そうに頷いた。

「よく言った。ならば共に戦う者として名乗ろう」

少女は大剣を担いで名乗った。

「ゲート破壊工作特殊戦闘部隊所属、リリイ・リュミエールだ」

「GSSC所属なのか」

知らなかった。

「何を今更、監視役がいると聞いていただろう？」

ああ、そういえば。

「で、リリイ・リュミエールだっけか」

「リリイでいい。ちなみに歳は同じだから呼び捨てで構わない」

同い年か。

堂々とした態度と物言いのせいで年上かと思っていた。

「で、門は何処ゲートにある？」

聞くとリリイは、ふっ、と笑うと、ついて来い、と言って走り出す。

俺はリリイを追って走り出した。

> i 3 5 7 5 6 | 4 4 6 1 <

復活 拳に再び力を込めて（後書き）

修治君復活！

少々早すぎましたかね？

思った事があれば感想下さい！

それと 新キャラ追加！

挿絵の方は追い追い載せてゆきます。

知性を持つ魔物 IO幾つ？（前書き）

PVが2000超えました。

多いんでしょうか、少ないんでしょうか？

兎も角、今後も区切りの良い数字を超えましたらご報告します！

皆さん、応援ありがとうございます、そしてよろしくお願いします！

知性を持つ魔物 IQ幾つ？

校庭に出ると、公園で見た時と同じ門が開いていて、そこから魔物達がぞろぞろと出て来ていた。

そして既に、数名の人が魔物達と戦っていた。

その人達にリリイが呼びかける。

「すまない、遅れた。これから私達2人は門を破壊する。皆は魔物達を校庭に留めておいてくれ！」

すると、戦っていた人達の中の1人が答えた。

「待ってましたよ、リリイさん。まったく、早く来て下さいよ。なんせ、俺らだけじゃ門を破壊する程の力はないですからね！」

それを聞いてリリイは渋い顔をした。

「誇らしげに言っな、誇らしげに」

そして、表情を引き締めて言う。

「ともかく、頼んだ！」

「了解です。まっかせて下さいよー！」

リリイは仲間との会話を終え、今度は俺に向かって言った。

「それでは、行こうか 門をぶち壊しに」

俺らは向かって来る敵を蹴散らしながら門ゲートへと向かって行った。

俺も頑張って魔物達をぶっ飛ばしていたが、リリイは凄まじかった。

戦闘技能は俺を遥かに凌駕していた。

どうやらリリイは瞬間移動テレポートが使える様で、凄い速度で敵を切り刻んでいった。

リリイの大剣では普通、大振りで遅い攻撃になってしまう。だが、リリイは瞬間移動テレポートを上手く使い、大剣の重い一撃で敵の体を四散させていた。

俺も負けじと魔物を倒していく。

が、やはりリリイにはかなわなかった。

こうして、俺達は順調に門ゲートへ近づいていった。

門ゲートに近づくにつれ、魔物の数も増えていく。

俺とリリイは相変わらず魔物をぶちのめしつつ進んだ。

リリイの動きには無駄が無かった。勿論、瞬間移動テレポートの影響も大きい。それが、それ以前にリリイの動きは精錬されていた。

大剣を振り、敵を薙ぎ倒す。そのまま慣性の法則に従って、失速した所で切り返す。そして、その動作の隙間も蹴りや瞬間移動テレポートで埋める。

その動きはもはや美しいとさえ言える。

対して、俺はと言うと

ドゴツ、ズガツ、ガスツ、

力任せに殴り飛ばしていた。

まあ、良いんだが。美しさは欠片も無いな。

そんなこんなで門に辿り着いた。

その時。

「伏せろ！」

へ？

と、とりあえず障壁展開ッ！

ボスッ。

気がつくともリリイに頭を抑えつけられ、顔面が地面に着いていた。
一応、障壁越しに。間に合って良かった。

そして次の瞬間、

ドガアアアアアアアアアアアアッ！

俺の上をビーム砲のようなエネルギーの塊が通過した。

リリイはサッとビーム砲の放たれた方を向いた。

俺もつられてそちらを見る。

辺りの魔物は皆消し飛んでいた。

しかし、一匹だけ残っていた。

俺とリリイの目線の先に、初めて見る人型の魔物が立っていた。

「外したか。まあいい、そもそも遠距離攻撃は性に合わん」

それがそいつの第一声だった。

喋った!?

知性のある魔物など居たのか!?

俺が知らないだけかもしれないのでリリイに聞く。

しかしリリイも知らないようで、

「こんな 知性が有り、喋る魔物など知らない。私も聞いたことがない」

と、言った。

それより、外したかって言ってたがやはり俺達を狙ったのか?

そう考えていると、魔物はこちらに歩いて来た。

見た目、すぐに襲いかかってはこなさそうだが、さっきのビーム砲の事もあるので、身構える。

隣でリリイも身構えるのがわかる。

すると、魔物が口を開いた。

「そんなに身構えなくとも、別にもう攻撃する気は無い。さっきのは気まぐれで放ってみただけだ」

気まぐれ？あれがか？

実はさっきのビーム砲、ナナと比べても5倍ぐらいの威力があった。

あれが気まぐれとは。

「先ほどのやはり貴様が？何者だ？」

リリイが尋ねた。

おい、リリイ。人に名前を聞く時は自分から名乗れよ。

人じゃなくて魔物だからいいのか？

すると魔物は答えた。

「済まない、申し遅れたな。我は怪力のスライン。7将の1人だ」

対峙7将 7将の1人は脳筋でした

7将、か。

なんだか無茶苦茶強そうだ。

憶測に過ぎないが、四天王の7人バージョンみたいなものだろう。

「7将とは何だ？」

リリイが聞く。

「うむ、我等魔族の中で最強の7人の事だ」

スラインとやらは誇らしげに答えた。

「7将の中でも順位はあるのか？」

更にリリイが尋ねる。

それは俺も気になるな。

その質問にもスラインは答える。

「勿論だ。まあ、我はその中では最弱だが、お前らの様な猿程度なら瞬殺出来る」

カチーン。少し鶏冠にきた。

人間様を猿呼ばわりとは良い度胸じゃないか。

まあ、魔族からしたら人間は“進化した猿”扱いなのもしれない。

乗る方がバカな低俗な挑発だが少しイラッときた。

このスラインとかいう奴、完全に俺らを見下してるな。
まあ、少し前に言った通り乗る方がバカな挑発だし、そもそも相手が7将とかいう奴らしいし、こんな挑発に乗るのは正真正銘のバカだ。

俺は賢いからとつと逃げ

「修治、奴を斬るぞ」

いました、バカが。

っていつか“斬る”の言い方おかしくね？

「ほう、我と闘るか？猿」

攻撃する気は無いとか言っていたくせに、嬉しそうに殺気を放つスライン。

「当然だ。殺つてやる」

それに対して負けじと殺気を放つリリィ。

まずいな、この話の流れだと確実に闘う事になる。

それより、“やる”の言い方もおかしくね？

「良い度胸だな、猿」

「こちらの台詞だ、化け物」

やばいって、もう臨戦態勢じゃん。

このスラインという魔族、その中では最弱と言っても7将の1人

だ。

それはつまり“全魔族中で7番目”という事だ。リリイも強いが、1人で、しかもキレて冷静さを失っている今の状況で勝てる相手ではない。

このままではきつと、リリイはスラインに殺されてしまうだろう。

仕方ないなあ。

「おい、スライン。俺と闘れ」

本当は俺こんな仲間を助ける様な熱いキャラじゃないんだけど。まあ、リリイには一度救われたし、命も心も。

「よかるう」

スラインはすぐに承諾してくれた。良かった。

が、やはりリリイは反論してきた。

「修治、そのムカつく奴は私が

「いや、俺が闘う」

「っ!?!」

しかし俺はその言葉を遮る。

俺の本気の剣幕にリリイが息をのむ。

「悪いな、今回はこいつも門^{ゲート}も俺が潰さなきゃなんねえんだ」

俺のわがままという事にしておく。
死なせない為だなんて言ったら素直に従わないと思うからな。

「分かった。」

リリーの説得完了。

さて。

「では始めよう」

スラインの方から声をかけて来た。

初めるのか。やだな。本当なら逃げ出し
たい所だ。 戦略的撤退をし

「怪力のスライン、参るっ！」

そう言った途端、俺に向かって突っ込んで来た。

しかし、速い！

今までの魔物とは桁違いだ。

「プロテクト！」

俺は障壁を生成する。

ガンッ。

障壁にスラインがぶつかる。

「ぐっ!? 痛いな。何だ？」

やはり7将というだけあって強い。

最初のイノシシの時の様に潰れて死んだりはしない。

ダメージはあるが、痛いな、と言う程度だ。

そしてスラインは、何故自分の攻撃が防がれたのか理解出来ない様だ。

しばらく考え、考えても埒があかないと思ったらしく、もう一度、今度は全力で殴りかかって来た。

ブンッ!

「プロテクト！」

ガシイイイ!

再びスラインの攻撃を防ぐ。

今度のは渾身の一撃だったようで、スラインの拳はダメージの跳ね返りで傷だらけで血まみれになった。

「我が攻撃でも破れぬ壁か。ならば

嫌な予感。

「プロテクト！」

反応出来ない速度で圧倒するまでっ!」

直後、ガシッと、と音がした。
見るといつの間にかゼロ距離に来て繰り出されたスラインの拳を
俺の障壁が防いでいた。

やはり速い。はつきり言って全く攻撃が見えなかった。
今の攻撃を防いだのも勘に助けられただけだ。
こんな攻撃を連続でされたら防ぎきれるか？

そして、そんな俺の気持ちを見透かすような笑みを浮かべ、スラ
インは言った。

「我がスピードについて来られるか？」

スラインの猛攻が始まった。

対峙7将 7将の1人は脳筋でした(後書き)

9話目です。

それと、7話目の最後にリリィのイラスト載せました。
是非ご覧あれ。

しかし、俺の与えたダメージはそれくらいで、俺自身は奴に一撃も加えていない。
いつまでも防ぎきれるか分からないし、籠城したらリリィが狙われる。

まずいな。

そんな事を考えていたら、スラインも同じように焦りを見せていた。

「くっ、猿ごときがあ、調子に乗るなあ！」

そして、さっき以上に激しい攻撃を繰り出してきた。

「チエアアアッ！」

「プロテクト！」

ガッッ。

「ぬんっ！」

「プロテクト！」

ゴッ。

2発強力な攻撃をだして、スラインが少し止まる。
少しのチャンス。
ここで賭けに出る。

足に力を込め、大きく後ろにパックスステップを踏む。

その時、後ろよりもなるべく上へと跳んだ。

スラインは俺が攻撃して来ると思っていたらしく少し驚いた様だが、すぐにパックスステップしている俺に攻撃をしようと突っ込んで来た。

そこで俺は障壁を生成、それを足場に空中から更に上へ飛び上がった。

今度こそスラインの顔に驚愕の表情が浮かぶ。

そして俺は飛び上がった先に障壁を生成、それを蹴りつける。更に体をひねり、スライン目掛けて全力の蹴りを叩き込む。勿論、足先には障壁を展開して。

イメージ的にはラ○ダーキックみたいな跳び蹴りだ。

スラインは即座に避けようとする。だが全力での突進の最中だ、慣性の法則に従い止まらない筈。

しかし、その予想は外れた。確かに普通なら止まれなかったであろう。だがスラインは普通ではなかった。

「う、おおおおお！」

ズガアアアアツ！

スラインは野太い叫びと共に俺に向けてビームを放った。

そしてその反動と障壁で跳ね返ったビームの衝撃で止まるどころか大きく後ろへ下がった。

そして

ズドオオオン。

俺は何もない地面に墜落し、クレーターを穿った。

「惜しかったな。だが、あの程度のフェイントは我には通じんぞ？」

スラインが余裕そうに言うてくる。

フェイントも駄目だ。

これで万策尽きたか。

仕方ない。“あれ”を使うか。

俺は目を閉じ、心を落ち着かせる。

そして、己が技の名を呟く。

「^{アーマー}全身装甲」

それを見たスラインが笑う。

「どうした、死ぬ気になったか？」

どうやら、瞳を閉じた俺を見て観念したと思うたのだろう。

だが、それは違う。

俺は死ぬ覚悟などしていない、殺す覚悟をしただけだ。

そして、俺は拳を握りしめ、スラインとの戦闘で初めて自ら突っ込んでいった。

スラインも拳を構える。

「ははははっ、そうだっ、やはり闘いはそうでなくてはなっ！」

バトルジャンキー
戦闘狂か。

しかし、俺自身も闘いで荒ぶり、昂揚を覚えていた。

そして、放たれたスラインの拳。

俺も右腕に全力を乗せて放つ。

迫るスラインの拳。

それに交差する俺の拳。

どちらも互いにヒットする軌道。

「うおおおおおっ！」

「はあああああっ！」

衝突。

そして決着が着いた。

相手の骨や肉を粉碎したのを感じた。

スラインはお互いの攻撃が当たった直後、俺の拳+自らの拳の分の威力を受け、それに耐えきれず粉々の肉片と血潮となって飛び散った。

ドチャドチャドチャッ。

スラインだった血肉が降り注ぐ。
あまりグロ耐性の無い俺にとっては好ましくない光景だ。

だが、全力で闘ったのでとりあえずスラインに敬意を示し、合掌する。

南無南無、御冥福をお祈りします。

と、そこで、

「し、修治っ！最後の一撃、あれは何だ！？あれほどの敵を一撃で粉々にするなどっ」

リリイが酷く狼狽した様子で聞いてきた。

俺は質問に答える事にした。

「あれは、俺の拳の威力だけじゃなくて、障壁で跳ね返った奴の攻撃の威力も加わってたんだよ」

が、すぐにまた反論で返される。

「しかしっ、貴様は先ほどプロテクトとやらを使っていなかったではないか！」

とりあえずまた答える事にした。

「あれについてはな、あの時俺、全身装甲アーマーっていつのを発動させたんだ」

「あーまー？何だそれは」

リリイは何の事だか理解していなかった。
そりゃそうか。

兎も角、説明を続ける事にする。

「全身装甲アーマーっていうのは、プロテクトで全身を覆ったものだ。勿論、動ける様に関節部で区切って部分部分で小さなプロテクトを展開した。プロテクトが盾ならアーマーは鎧だな」

俺の話聞いて、しばらく考えていたリリイだが、いかなりガバツと顔を上げて俺に言った。

「しかしっ、それでは最強ではないか！全身をあの障壁で覆うなど！何故今まで使わなかった!？」

「それは、

それは、過去のトラウマのせいだ。

この力のせいで気味悪がられ、避けられた。

中学では隠した。そうしたら友達が沢山できた。

そして、この間までプロテクトも使わずに、普通に過ごしてきた。ただ、能力をひた隠しにして。

全身装甲アーマーも、こんなピンチになるまでは使いたくなかった。

だが、それも今日で終わりだ。

俺は、仲間を守る為にもう一度この力を使う！

だから俺はリリイにこう答えた。

「くだらない過去に縛られてた。けどもっ、俺は自分の力と向き

合うよ。この力で大切な人を守れる様に。リリイも俺が守るよ」

俺の心から思った事を伝えた。

俺を救ってくれたリリイも大切な人だ。光やナナ、他のみんなの
ように。

だから俺が守る。

すると、リリイはいきなり顔をボンツと赤くした。

何故？

そして、よくわからない事を呟き始めた。

「 た、たつ、大切なつ、人！？ま、守る？わ、わ、わわ
私を、まも、守るつつつ？」

支離滅裂で何が言いたいのかわからない。
が、リリイの中では結論に達した様で、

「私を 守る 。そうか、スラインとかいう奴と闘ったのも
。」

修治、そ、その、スラインと闘ったのは その 奴が強いと分
かっついて その わ、私を まも、守ろうと してくれ
た のか？」

俺に聞いてきた。

あちゃー、バレてた。

怒られるかな ？

「ああ、実は 「

怒られるー。

そう思った。

が、叱責は飛んでこなかった。

その代わりに

「そ、そうか。　その、あ、ありがとう!」

お礼を言われた。

「あ、ああ」

予想外の事に面食らう。

そのあとしばらく、何故かリリィは嬉しそうにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5528y/>

GATE

2011年11月27日01時55分発行